

こぐまの春のいっぽ

なかむら ふみ
中村文

茶色のこぐまは、冬のあいだ、山のほらあなで生まれ
ました。暗いあなのなか、母さんのそばでじっとしてい
ました。母さんはときどき、春にさく花や、にぎやかな
鳥たちのことを話してくれました。

ある朝、こぐまはひよこつと顔をあげて、いいました。
「なんだか、あつたかいねえ」

すると、母さんがいいました。

「春が来たの。さあ、そとへいきましよう」

こぐまは母さんについて、いっぽ、そとへでました。

なんとという明るさでしょう。空に、まるいお日さま。
地面に小さな花がさいています。鳥の声がつつびつび、聞

こえてきます。

「ふんふん、なんのにおい？」

こぐまは地面にねころんで、ほつぺたをびたつとつ
きました。やわらかい葉っぱが、ふかふかしています。

母さんは、いいました。

「おや、よもぎね」

「ふんふん、よもぎのいいにおい」

こぐまは、ぼかんとまえを見ました。すると、なにか
がうかんんでいます。こがね色をした、小さなかたまりで
す。ちらちらゆれながら、地面の花にぼろんと落ちました。
まるでひかりのしずく。

こぐまが手をだすと、ふわっとうかびます。

「あれえ、うかんだり、しずんた
り。これなあに？」

ふわりふわり、それは高く飛び
ます。

母さんにはっこりして、いいま
した。

「あらあら、ちようちよね」

「やあ、ちようちよ！ どこい
くの」

ちようちよは、草むらのほうへ
飛んでいきます。こぐまは、せつ
せとおいかけました。そのとき、
ごつん！ なにかにぶつかりまし
た。

見ると、大きな体がどっかりと
立っています。こぐまとおなじ茶
色です。

「わあ、母さんより大きい。これ



こぐまは、よも
ぎの葉っぱを見
つめました。葉
っぱのうえに、
なにかがくつ
ついています。

赤いまるい
つぶです。

ぴかぴかし
て、まるで

お日さまの
かけら。

そつと手で
のせると、ちびち

びうごきだしました。そのままうでへと、のぼっていき
ます。

「わつ、どんどんうえにいくよ。これなあに？」

あれよというまに、かたにのぼって、耳のうえまで来
ました。ぶつと音がして、それは飛んでいきました。こ

ぐまはふるつと耳をうごかします。

母さんは、わらいました。

「うふふ、てんとうむし」

「てんとうむし、飛んでった」

なあに？」

こぐまはそれを、ぐんと見あげて目をまるくしました。
空いっぽいに、ピンク色の花がさいています。花びら

はきらきら輝き、まるで空の花ばたけ。

こぐまは、うでをうんと高くあげました。背のびをして、
飛びはねました。空の花には、とど

きません。

そのとき、風——。どとうと、つ
よい風が吹きました。

ぱつと花びらは空に散らばり、そ
こらじゆう輝きはじめました。花び

らはきらきら、こぐまのまわりを飛
んでいます。

こぐまが、えいっと手をのばすと、
いちまいの花びらがくるりとまわつ

て……ちよんとおでこにのりました。
母さんは、そばに来ていいました。

「まあ、さくら」

「やつたあ、さくらが飛んできた！」

こぐまはさくらのなかを、きらき
らかけていきました。

(おしまい)

